
カリーナエの鳥籠

夜川真夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カリナーエの鳥籠

【Nコード】

N0939V

【作者名】

夜川真夕

【あらすじ】

魔法使いの弟子ユレーナは夜の森で少年キラルティエを拾った。訊けば人攫いにあい逃げてきたという。彼の故郷は遠く、どうにか家族に無事を伝えようとしているところで、今度はユレーナが攫われた。魔法使いの目の前で、「ぬか床があー！」との叫びを残し少女と魔法使いと人と異種族が出てくる、シリアスともギャグとも言えないファンタジー（たぶん）。ライトノベルやジュブナイルな感じで残酷表現が出てきます。ご注意ください。性描写は直接的な表現ではありませんが、会話として出てくるかと思えます。十万字

前後になる予定。嘘。すみません。十万字は軽く越えます。

01（前書き）

話が進むにつれて血まみれ肉まみれ（肉片で意味で）描写があります。ご注意ください。

面倒くさいので一話ごとに警告は出しません。

性描写は直接的な表現をしないよう心がけますが、こちらもやっぱ
りライトノベルやジュブナイルくらいには出てくるかと思っています。
がつつりエロは書きたくなったらムーンライトに書きます。書くか
な、どうだろ。

登場人物紹介

ハイラム・クレバーン << 魔法使い

ユレーナ・デীরリッハ << 魔法使いの弟子

アゼルドアー・ファガ << 仕事相手

オズグッド・ワーレイ << 空挺総軍第十一空挺師団第二飛行

群第六飛行隊所属

キラルティエ・アーシエスネードルング << シギリエの弟・

翼種

シギリエ・アーシエスネードルング << キラルティエの兄・

翼種

ミラ・トエリス << アーシエスネードルング家の昔なじみ

とととと、と足音が聞こえたわけではない。開け放たれたままの扉の向こうに気配を感じて、作業の途中で手を止めた。

「今日は黒猫か」

肩越しに振り返ったハイラムは、作業部屋に繋がる居間の床を踏む小さな獣の姿をみとめた。強ばった体をほぐすついでに右肘を背もたれにかけると、年季の入った木の椅子も耳障りな音を立てて軋む。

「一昨日は三毛、昨日はキジトラじゃなかったか。猫続きだな」

若い猫は逆三角形の顔を男に向けて立ち止まった。瞳孔は昼の光に細まり、感情を読み取りづらい。

返事のつもりか、みゃあ、と鳴いた。

「声帯の使いかた、上手くなってきたな」

首を傾けて筋を伸ばしながら、徹夜明けの男は、猫の丸まった足先からしっぽの先までじろじろと検分する。髭の一本一本、全身の筋肉の動き、細かいところまで見落としがないよう醒めた目で観察し続けた。

「……今によ発音、猫っぽかった？ 今しゃべってる言葉はわかるかにゃ？」

猫はいたたまれなくて、身を縮めながら話しかける。

「語尾が、にゃ、になってる以外は」

ようやく粗が見つかった、とでも言いたげに、男は眉を寄せた。

「にゃ!？」

毛むくじやらの小さな顔ではわかりづらいが、猫は恥じらっているようだ。前脚で口元を洗うようにこすった。

「ついでに言つとくが、全身しっぽの先まで汚れてるぞ」

男はからかうふうでもなく事実だけを述べる。それから自分の要求を簡潔に伝えた。

「メシ」

「はあい。でも、先に体洗ってきてもいい？」

「そりゃ、先でいい」

喉の奥で転がるような声音で答えた猫は、歩調を変えずにそのまま部屋の奥へと消えた。

壁の向こうからにやにゆによに特徴のある小さな声と耳鳴りに似た甲高い音、それに続いて水音が響いてきてから、ハイラムは立ちあがった。天井から吊されている枯れた草の束や埃をかぶったなにかの種子を避けつつ腕をまっすぐ上に伸ばし、そのままゆっくりと右へ左へ体を傾けた。同じ姿勢でいたせいで凝り固まった腰骨や脊椎がバリバリと恐ろしい音を立てる。少しは元の身長に戻ったかどうか、と年寄りくさいことを考えながら、最後に首を大きく回した。机の上に視線をやる。

徹夜をしなくとも間に合った注文の品は、不安定ながら美しい形をしたいくつもの小瓶に入れられて、作業場の窓から差し込む陽光に薄い鴉色の影を落としていた。

納期まではあと数日あるが、できたのなら早めに持っていくか。そうして帰ってきたらがつつり寝る。寝倒す。その前にメシ。

集中力が切れてぼんやりとしてきた頭で今日の予定を立て、ハイラムは免許証の在処を探した。普段出かける時に持ち歩くそれがないと、いくら顔見知りにも渡すだけであっても、下手をすれば逮捕される。小さな街で、逮捕する側とも顔見知りだが、備えはあって困ることはない。免許証は持ち歩くのが常識だ。

免許証はいつも通り、得体の知れないものがあちこち散らばっている机の上ではなく、前の壁に吊り下げられていた。ヘビーウェイト樹脂板には所属を示す紋章と、いくつかの資格に印が彫り込まれている。？魔法技術者・第一種医薬錬成師？とりあえずはこれだけ証明できれば問題がない。ハイラムは一度目をつぶり、噛みしめるように小さく頷いた。

「先生、なにか食べたいものある？」

「がつつりしたもの」

突然訊かれて、なにも考えずに咄嗟に答えてみると、不満そうなため息が返ってきた。

「徹夜明けなのに重たいもの食べて大丈夫？」

作業部屋の扉から顔を覗かせた少女は、どこことなく先ほどの猫の面影を残している。小さな卵形の顔の中の大きな瞳がそう思わせるのかもしれない。襟足で揃えられた髪は濡れていて、乾けばゆるく巻いて手に負えなくなるのだが、今はまだ水分を吸っておとなしくしていた。黒くはない。赤みの強い金褐色だ。

変身 の魔法は、趣味や愛玩に特化するか諜報活動のために特化するか、長いこと専門家のみならず一般のあいだでも意見が分かれています、いまだ正答はない。また、出来映えについても大きく二つに分類される。本人の元の姿と変身後の姿が似ることは、ある人から見れば術によって己を見失わないだけ腕がいいという証拠であり、また別の人が見れば想像力が欠ける変貌は修行が足りないという判断が下される。少女の師匠の考えはどちらか一方に傾いているものではないが、人の姿の時と猫の時では毛色がまるきり違うのはひとえに彼女の努力の成果だった。

ここ最近日課にしている 変身 の鍛錬を終えて、二人分の食事の用意を始めたユレーナは、がつつりしたもののががつつりしたものと脳内のレシピ集を漁りながら台所に向かう。

「……がつつりしたものってなんだろう？」

「わからん」

「なにそれ。具体的に料理名を挙げてくれたら楽なのに」

「腹減りすぎて、よくわからなくなった」

「でも先生、食べたなら寝るんでしょ？ だったら軽いもののほうがいいよ」

「いや、メシ食ったら出かける。おまえも一緒に行くからな」

「え？ どこへ？」

「依頼されてたものができたから、さっさと届けてくる」

「あれを届けに？ 今から？」

「ああ」

「ごはん食べて身支度してからだと、街につくの夕方になりそうですよ。先生、一度寝てから明日行ったほうがよくない？ あの梱包に時間かかりそうだし、先生が寝てるあいだにわたしやつくよ？」

「よくない」

「なんで」

「納品しないと落ち着かない。泥棒に入られて、あれを盗まれたら、この数日の働きが無駄になる」

「こんな山奥に誰も来ないと思うけどなー。結界衝の見回りしても異常ないし、森も静かだよ」

心配性だね、とユレーナは朗らかに笑った。

「眠いは眠いが、今日の夜までは起きてられる」

ハイラムは、わかりにくく己の睡眠時間を気に懸けるユレーナに、心配性はどつちだ、とは言わないで、ケースに入れられた免許証を首から提げる。薄いカードなのになぜか重く感じられて、伸ばしたばかりの背筋が再び縮む感じがした。

「メシはおれが作るから、おまえもさっさと着替えて用意しとけ」

「え、この格好ダメ？」

ユレーナは自分の体に視線を落として、首をかしげた。

元の姿に変容し、体を洗って毛皮についていた蜘蛛の巣などの汚れを落とした少女は、薄手の白い服を身につけていた。ゆつたりと裾が広がる半袖のチュニツクに太めに編んだ革ベルトを締め、墨色の細身のズボンを合わせている。色合いは地味だがユレーナと同じ年頃の少年がよく着る服だ。この家がある山奥から麓の街に下りる時は、これにふくらはぎ丈のブーツを履く。確かに若い娘はあまり着ることはないが、普段着として広く普及しているこの服に問題があるようには思えない。ユレーナはどこか汚れやほつれがあるのだから、体をひねって自分の体を見回した。

「半袖だから？」

「それもある」

「他にはなにが？ 半袖がダメなら、これになにか羽織ればいいしよ？ それを言ったら先生のほうがひどいよ」

「……そうか？」

「そうだよ。鏡見てみたらいいよ」

十以上も年下の弟子からの苦言に、ハイラムは眉根を寄せながら顎を撫でた。指先にざらりとした硬さを感じる。そういえば髭を剃っていなかった。当然顔も洗っていない。寝て、起きたわけではないので、朝に行う日課をすっ飛ばしていた。毛深いほうではないが、確かにこの姿は見苦しいだろう。整えやすく一定の量と長さで生えてくれるならまだしも、この年になっても長さも場所もまばらに生える髭はどうも格好がつかない。

「先生は無精髭が似合うタイプの顔じゃないんだから」

共に暮らし始めて数年が経つ弟子の遠慮のない言葉に、そうかとハイラムはあっさり納得した。

黙って首にかけた免許証を外し居間のテーブルに置くと、台所の近くにある風呂場へ向かう。ユレーナとすれ違いざま、長めの髪を無造作に結っていた紐をほどいて、その手に押しつけた。

「メシ食ったら出かけるからな」

「なにも今日じゃなくてもいいと思うけどなー」

ユレーナはぼやきながら、あまりがつつりしたものではない食事を作るために台所に引っこんだ。

01（後書き）

超見切り発車。

一人称間違えていたので訂正しました。（2011/07/23）

火を使うと熱がこもる。焦げないようにフライパンを揺ると油がはねた。

台所の小さな窓は開けているが、風の通りは良くなかった。こんな山奥でも夏の熱気は訪れて、ついでは森の木々や土が発する湿気がところどころ霧を生み出している。

がつつりしたものという要望はこの際わきに置いておいて、胃に負担がかからなくて手軽に食べられる食事を用意しているうちに、濡れた髪は乾いてしまった。空気を含んで大きく波打つ。改めて出かける格好をするときに、髪をまとめるのが一番手間がかかるかもしれない。

しばらくのあいだ壁を這う水道管を通る水の音と、周りに跳ねる大粒の雫の音がして、静かになった後に扉が開いた。衣擦れは生活音にまぎれて聞こえない。ジャワジャワジャワ、キィキィキィと、なにが鳴いているのか、いくつもの生き物の声が混ざり合い、森の中にただ一軒佇むこの家屋に響いてくる。

「……余計に暑くなつて疲れた」

扉が開く音と一緒に声が聞こえた。

汗や汚れを洗い流してすっきりしてきたはずのハイラムが、頭から被ったタオルで黒い髪を乱暴に拭きながらごちる。目の充血は治る気配はないが、髭を剃り、身なりを整えると、身長があるせいで線の細い印象を受ける若い魔法使いがそこにいた。上は袖なしの前身頃を紐で結ぶタイプのアンダーシャツで、下は薄っぺらい生成のズボンを履いている。

ユレーナは、見た目に似合わず隙だらけのこの男の生活様式に、ここ数年のあいだで慣れた。

そのうちパンツ一丁で風呂からあがってくるようになったら、思春期の女の子らしく汚らわしいものを見るような目つきで師匠を睨

もうと思っているが、まだまだ先は長そうだ。その点については、ちょっと安心していい。　　うっかり、お父さんというかおっさんばい、と言いでもしたら絶対に怒られる。

ユレーナの胸の裡など知るよしもない魔法使いの彼は、行儀悪くも食卓にのぼる野菜の漬け物をひよいとつまんで口に放りこんだ。塩と鷹の爪で漬けられた青い瓜が、味蕾や喉、内臓を刺激しながら飲みこまれた。不足した栄養分を補ってくれるような気がして、二、三個立て続けに味わう。

「じゃあ今日出かけるの、やめようよ」

ユレーナは米を握る手を休めずに、考え直してくれないものかと渋り続けた。道中のお弁当にとおむすびを作っているが、不要になればいい、と思っている。保存しておいて晩ご飯にしたらいい。

「いや、今日行く」

ハイラムは頑なだった。

「寝不足で車の運転されると恐いんだけど」

「車は使わない。ナザで行く」

「えっ、品物は割れ物なのに」

「梱包したうえで　停止　か　不可侵　でもかけとけば平気だろう」
「なんでそういうところ大雑把なの、先生」

ナザに乗って街まで行くと疲れるんだよー、と弟子は師匠に文句ばかり言う。

「ナザのほうが早く行ける」

「そうだけど」

「おれは鞍つけてくる。おまえも早く着替えるよ。準備ができたらずぐに出るぞ」

そう言いながら魔法使いはユレーナの手の中の握り飯をちらりと見た。外出着に着替えるために自室へ入り、長袖に腕を通しながらすぐに出てきて、裏口玄関に置いてある革の長靴を履くとそのまま厩舎へ歩いていった。

道中、移動しながら食べるつもりでいるのだろっ。その可能性も

あるかなと考えていたので麺類などはやめておいたのだが、ユレーナはそうなるだろうなと思っていた方向に物事が進んでいくのに、別に喜びはしなかった。先ほどまではごはんを食べてから出かけるつもりだった師匠が、この握り飯を見たせいで今すぐ出立すると思いつたのではないか。どちらも想像がつく。なんか失敗したかなあとも思う。

ユレーナは手早く準備を済ませると、戸締まりの確認もしてナザの手綱を取りに行った。

重なる枝の隙間から覗く太陽は傾きつつある。木々の葉が無数の影を作っても、上昇する気温と太陽光はじりじりと肌を灼いた。山でこうなら下界はもつと暑い。

街までの距離とナザの平均速度を計算すると、小一時間で到着するはずだ。

？ナザ？は傾斜のきつい山間部で飼育されることが多い大型の草食動物で、前側が二つに割れた蹄とその後ろに分岐した小さな突起を持ち、額に湾曲した角が一本生えている。飛ぶように岩場や山道を駆け、一説にはその鋭く長い角で下生えや張り出した枝を薙いで先を進むとも言われているが、ユレーナはそこまで早く走らせることがない。小一時間、鞍上で震動と速度と風圧とに耐えられるかが心配だった。

風よけのために長袖を羽織り、革の手袋も忘れなかった。髪を整える時間はなかったが、どうせこれから風に煽られるのだ。街のそばに行ったらどうにかしたい。根性のあるくせ毛がどうにかならねば。

外套のフードを目深に被り、その上から顔の半分を隠す大きさのゴーグルをする。口元を呼吸の確保のために付属の布で覆うと、服装と成長過程の細身の体とが相まって性別不詳のなりとなった。

「先生、ナザの上で寝ないでよね。落ちるよ」

「おれをなんだと思ってるんだ、おまえは」
「寝不足」

「……急ぐぞ」

もうナザに跨またがっていたハイラムは短い答えに渋面を作り、ゴーグル越しに土がむき出しの路面の遠くをまっすぐ見つめた。膝丈の青いチュニツクに細身のボトム、その上から長袖の外套を羽織り、首元に筒状のスヌードを巻きつけている。

スヌードを鼻まで押しあげてから低く号令を出してナザの手綱を操る。ユレーナもナザを続かせた。

茶色の胴体にくくりつけられた木箱が大きく揺れるたびに、鳴りもしない、がしゃん、という音が聞こえてきそうに横に並ぶユレーナはびくりとしたが、魔法をかけた当の本人が平然としているため、努めて気にしないようにした。

横から無言で手を伸ばしてきたので、帆布鞆に詰めてきたおむすびを取り出して一つ渡す。水筒に入れてきた茶も差し出すと、もう片方の手で受け取った。手綱から両手を離しても、よく訓練されたナザ達は一定の速度で歩いていった。

鞍の上で揺られながら腹を満たすと、常歩なみあしから速歩はやあし、駈歩かけあしを経て、二頭のナザの体が温まったのを見計らい、襲歩しゅうほで走らせることにした。雄と雌のナザは嬉々として駆けだし、じゃれ合うように追い越し追い越されを繰り返しているうちに背に人を乗せていることを忘れた。

ユレーナは悲鳴を上げることもできずに歯を食いしばる。胃の中のものがかき混ぜられる感覚が不快だった。前に行くハイラムは背を丸め、鎧あづみを固く踏んで中腰になり、ナザの歩様ほように合わせていた。背が上下しない。無駄な力を入れず、師匠と同じように姿勢を保ちたいのだが、振り落とされないようにするだけで精一杯だった。とにかく必死にしがみつく。

だから急ぐときにナザに乗るのはやだな。そんな愚痴を思い起すこともできない。

ナザは停止や速度落とせの命令がないのをいいことに、ひたすら前へ前へと進んだ。体高にあまり差がないナザは心持ち雌のほうが

速く、雄は雌の尻を追いかけて続けた。ユレーナが騎乗するナザの雄は、雌を追いかけるのが楽しくて仕方がないといった様子だったので、この配置は長らく続いた。

ハイラムは時折、目の端で後ろを確認しながらも、速度を落とすことはしなかった。

ゴージェルの奥の瞳がどのような感情を持っているのか、ユレーナにはよくわからない。未熟な弟子を心配しているようにも、出来の悪い弟子に落胆しているようにも、幾通りにも考えられた。

できることがあるなら限界までやらせて、容易に手を出さない師匠の方針は、出会った頃から変わらない。ユレーナはそう思い知らされるたびに身が絞られる気がする。己を律するための内省にはいつだってかすかな恐怖がともなわれていて、ひどくなると足元が崩壊して己を引きずりこむ虚無感にまで発展した。不安を飲みこむのが、なかなか骨だ。

甘えてみせれば、氷水に沈んでいくのに似た落ち着かなさまでも統制してみせろ、と魔法使いは言い切る気がする。だが、訊ねたこととはない。訊いて、返ってくる答えが恐い。

あの日、無愛想な魔法使いに拾われたことで運命が変わった。とても感謝している。

とはいえ、今も、ナザから落ちても拾いに来てくれるだろうか。

石切場となっている山の側面をナザの脚力にまかせてほぼ直降で下りきつて、ようやく小休止でもしようかと声をかけられた。

生きてるか、と問われて、

「……なんとか」

か細く応えた。風よけの布に効果があったのか疑問を持つほどユレーナの声は噎れてしまっている。暑さや石切場一帯に漂う破碎された礫から出た粉塵のせいだけではない。緊張で口腔が乾ききっていた。

ナザはもともこの地に棲息していた岩場や山を縄張りにする獣で、長い時間をかけて家畜化されたのだと根気よく説明されたうえに、実際岩場を駆け下りる練習を幾度もしてきてはいるが、頭から真っ逆さまに落ちる感覚にはいつまでたっても慣れることができない。

曲がりくねった山道を走る自動車とは比べものにならないほどの速度で駆け下りたせいで、ユレーナは額にびっしりと汗をかき、手綱を握ったままの両手は小刻みに震えている。指を動かすことができないため、休憩らしい休憩も取れない。

師匠は短く嘆息してナザから降りると、大きく肩で呼吸をする弟子のそばに寄り、白く硬直する指の一本一本をはずしていった。

「ここから車にするか」

「……最初から車にしてよ……」

ユレーナはさらにぐったりと疲労に身を沈ませながら恨み言を呟く。

手綱から手は離れたものの、足腰が萎えて体がうまく動かない。男はまた一息をついて両手を差しのべた。幼い子供に向かってするような態度に、来年には成人を迎える年頃の娘は赤面した。この年で抱っこはちょっと、と口にするのも憚られる恥ずかしさだ。数

年前はともかく最近抱つこなんでされることがない。そもそも普通に生活しているなら互いの体に触れる必要がない。不肖の弟子と呆れられているのもこたえるが、いつまでたっても庇護すべき子供だと思われているのもなんとなく癪だった。

男の手を取るのに躊躇して時間を稼いでも全身の震えは一向に治まってくれず、ユレーナは心ならずも情けに頼る。

「……先生、どうしてそんなに急いでるの……」

石切場を迂回する坂路なら家を出るところから自動車を使えた。

時間がかかっても乗り心地と弟子の心身の安寧を考慮して自動車を出してほしかった。

「街に着くのが遅くなるだろう」

だから明日出かけようって言ったのに、との意見も聞き流された。立ってられないのでしゃがむユレーナを脇目に、ハイラムは車を出すために石切場そばの小屋へ向かう。

「……先生、言葉が足りない」

気落ちしたままこの数年思い続けていたことを口に出してみれば、魔法使いは不意を突かれた様子で振り返り、ゴーグルの下目を丸くした。端正な顔が啞然としてゆるむ。

「今さらそれか」

一拍置いて小屋へと向き直り、埃よけのゴーグルをはずして軽く目を伏せた。

「……わたし何度か言ったような気がするけど」

「そうだったか」

「……よく覚えてないけど」

「おれも覚えていない」

少女の八つ当たりも気にせず、身を屈めてあちらこちら自動車の状態を確認してから、男はナザの背から荷物を積み替えることに専念した。

精密な手綱さばきと極度の緊張を強いられた肉体は、疲労の頂点

に達して強制的に停止、感覚の遮断をしようとする。助手席でほんやりするユレーナに、ハイラムはなにも言わなかった。沈黙も駆動音にまぎれる。冷石を発動させるとものの一分もたたないうちに汗が引く温度に下がり、車窓からの日差しも気にならない程度には車内は快適だった。離れたナザは勝手に山で遊んだあと、小屋に帰るだろう。

蛇行する山道を進むうちにぼつぼつと民家が現れ、そのうち集落が寄り合わさって街らしい様相となってきた。土がむき出しの道が舗装された境目付近にある古い家の前で老人が畑仕事に精を出しているのを車窓から眺め、サウルのおじいさん今日も生きてるな、と失礼ながら二人して同じことを思う。

二人が暮らすえいく穎区を抜けてだんだんと混雑して車線も多くなる道路を一時間半ほど走らせ、南区の目的地に到着する。商業施設の建ち並ぶ一角、狭い間口のガラス扉から見える店内のカウンターに男がもたれ掛かっているのが見えた。

「アゼさん？」

店の扉上部に備えつけられたベルが鈍く響くのと同時に、ユレーナが驚いて声をかけた。

「よお、ユレーナ。久しぶりだな。ハイラムも」

鷹揚に振り向いた男は片手を挙げる。

「依頼人って、アゼさんだったの？」

「いや、俺じゃない。俺はたまたまこっちに用事があつてこの街に寄っただけだ。それで昨日、つっか今朝方か。ハイラムに連絡してな。暇ならメシでもどうかと思ってよ」

アゼルドアーは怠そうに身を起こすと、少女の背後に佇む魔法使いを見やった。よく似合う無精髭で覆われた顎を撫でながらにやりと笑う。

「顔色悪いな、魔法使い。優男が台無しだぞ」

「納品に来たんだ。おまえも来るなら当日じゃなくて早めに言え。そして仕事持つてこい」

「俺が仲介する仕事を受けるなら、もつと寝る時間なくなるぞ」

「短期で仕上げてそのぶんふんだくるから問題ない」

「おいおい、値引きの交渉もなしだよ」

アゼルドアーは肩をすくめた。商売人というかなんでも屋として各地を往来する男は、地域や階級を問わず顧客が多い。金離れがいいという意味での上客が金に飽かしてしてくる無理な要望に応えられるハイラムとは持ちつ持たれつの関係だ。

男二人のやりとりを横目に、ユレーナはこの雑貨屋の看板娘と世間話をしていた。店の上階が住居となっていて、店番の娘の母親である店主が降りてくるのを待っている。

「ハイラムって、見た目はいいのに愛想がないわね、相変わらず」

ユレーナよりも先に成人した娘は、そつと声を潜めて値踏みするかのように同世代の男二人を見比べた。がっしりした体格で圧迫感のある男くささながら気さくなアゼルドアーと、その横に立つとますます細く肉体労働に向いていないように見える無愛想なハイラムは、彼女にとってどちらもう一步というところらしい。あの綺麗な顔で笑ってくれたり話やすかったら最高なのに、といつも通りにバツサリ切り捨てた。

「先生、完徹なんだって。締切まではまだ日にちあったでしょ？
なのになんか頑張っちゃって」

「まあ、それは助かるわ。実は依頼した数だと予約分でおしまいなの。また同じ数量を引き受けてくれるかしら」

「うーん、それは先生と話してね」

カウンターに背を向けて俯きがちにぼそぼそしゃべっている男達の様子を窺いながらユレーナは答えた。タイミングを見計らい、会話が途切れたあたりで師匠に短く問いかける。

「先生、わたし少し出てきてもいい？」

魔法使いだけでなく、商人もハツとして少女のほうへと振り返った。

「ああ、いいぞ。おれはここにいる」

「夕飯一緒にとろうな、ユレーナ」

「うん。じゃあ、ちよつと行ってくるね」

にっこりと笑顔でひらひら手を振って、ユレーナは店を後にする。ガラス扉越しに目的の施設へ向かって駆け出す姿が見えて、すぐに建物の角に消えた。

誰もなにも言わずに後ろ姿を見送る。

「……なにか手がかりでも入っていればいいけど」

店番の娘が切なげに呟いた言葉がやけに重たく店内に響いた。

03（後書き）

また一人称間違えていました。
すみません。（2011/08/04）

施設内のあまり人目につかない場所に設置してある端末機を借りる。事前登録した個人名とパスワードを入力、掌形と血管と虹彩の生体認証を行うために専用の紋章が刻印されたプレートを各部位にかざして、いくつかの設問にチェックを入れてから、得たい情報のキーワードを検索していった。流れる文字は膨大でもほしいものはないも見つからない。期待していたわけではないので落胆も小さかった。これ以上傷つかないように。四年五年同じことを繰り返しているうちに、脆い心が大波に翻弄されて上下左右に揺れ動くのが辛くなってきて、あまり期待しないよう無意識に歯止めをかけてきた。それでも、いつも、なにかあれば、と願ってしまう。

そして今日も気分が沈むだけで終わった。担当係官の励ますような眼差しも失意に上乘せされる。

早々に戻ってくると、魔法使いと商人は難しい話をしていらしい。先ほどと変わらない姿勢で腕を組み、険しい表情で額を付き合わせていた。ユレーナが二人の邪魔にならないようカウンターに寄ると、納品手続きは完了していて、木箱から取り出された小瓶が並べられていた。一つの破損もない。ナザの乗り心地を思い出しながら胸を撫で下ろし、気の重さを払拭するためにも口角を上げると、カウンターの向こう側にいる店主が、困ったものね、とでも言いたげに微笑んだ。

「夕飯はマドラの店でいいか？ あそこなら子供も食べられるものがあるだろう」

話が一段落したところで、商人が眉尻を下げて人なつこい笑顔で振り返る。

背伸びしたい年頃の娘には気になる言葉だったが、ユレーナにはそう茶化してくれたほうが有り難かった。「もう終わりか。早かったな」などと言われなかったことにも安心する。短時間で用事が済

むということとはめばしい収穫がないことを意味しているからだ。

「アゼさんと先生が恐い顔してたのって、どっちがおごるか揉めていたから？」

くすつと笑ったユレーナがいたずらっぽく返すと、男二人は虚を突かれてむつとし、一瞬沈黙した。互いに顔を見あわせ、同時に握りしめた拳を突き出したかと思うと、

「……じゃんけんしょ」

勝負に出た。

果たして、アゼルドアーが肩を落として財布の重みを確認しているあいだに魔法使いとその弟子がマドラの店に向かうと、肝心の料理店は臨時休業だった。斜向かいの弁当屋の店主が言うには、一人娘の具合が悪いという。

「マドラもギャビンも一緒に出かけてるとは珍しい」

「心配でおちおち店も開けてられんのだろう。ましてや初孫だ。同じ国内に住んでるらしいが、この街から旅客機で三時間以上かかるなら、なにかあったときにすぐに駆けつけられないもんな」

「ここからセニヤ市？　まで？　って言うてたっけ？　シーラさんが住んでいるのって。国の端から端だもんね。シーラさんもおなかの赤ちゃんも無事だといいいけど……」

マドラとギャビン夫婦とその娘のシーラは、ユレーナの恩人だ。

四、五年前は今に輪をかけて無愛想だったハイラムが気まぐれに十歳の女の子を拾ったものの、扱いを決めかねて一時期この家族の助力を求めたことがきっかけで、それ以来ユレーナのことを末の娘のように可愛がってくれている。

マイヤ一家は？　オーメイト？　で、ユレーナと同じ種族だ。？　オー

メイト？　は単純に？　オー？　または？　ヌル？　または？　デズ？　と呼ばれている。？　鱗種^{りんしゅ}？　？　翼種^{よくしゅ}？　などとは成長速度が異なるため、ハイラムとしてはできることならオーメイトの一般家庭で生活の基本を学ばせたかった。特に、これから第二次性徴を迎える少女の生態を。

当然知識としては知っているが、心構えなど細かい部分は同性に教

わったほうがいいだろうとの判断だった。とはいえ魔法使いの交友関係が独特で多彩だったのか、当時はここタルバルダルのみならずこの国全体的にオーメイトの割合が高いことを知らなかった。生活全般に興味がなかったせいもある。

マイヤー一家のおかげで、ユレーナは稼ぐこと以外は一人で暮らしていただけるだけの生活能力を身につけた。山奥の家と一緒に暮らし始めて数年が経ち、ハイラムは働き者が同じ家にいる楽さに慣れすぎてどうしたものかと密かに困っているのだが、口には出さない。

「マドラさんに味をみてもらおうと思って、ぬか漬け持ってきたんだけどね」

「おまえ、おれには割れるんじゃないかと文句言ったくせに」

「さすがに瓶詰めじゃないよ、ジッパ―付き汎用樹脂バッグに入れたから」

「俺食べたい。ここで切ってもらおうぜ」

アゼルドアーはやはり知り合いであるこの店主を呼んで、ユレーナのぬか漬けを切り分けてくれるよう頼んだ。店長は料理を卓に並べつつ愛想良く引き受けてくれる。持ち込みはお断りさせていただいています、との言葉がないかわりに、私どももご馳走になつてもいいですか？ と訊かれて、ユレーナは恐縮して顔を真っ赤に染めた。恨めしそうにアゼルドアーを睨む。商人は大きな口を横に広げてニカツと笑った。

マドラの店名物の、というよりギャビンの作る特製たれ付き鶏の半身揚げが食べられないのは残念だが、この店はこの店でオススメ料理が美味しい。キャセロールの中でぐつぐつ煮立つタコや、とろみのあるソースがかけられた生野菜と縮れた麺、香辛料をきかせてパリパリに揚げられた手羽など、次々に運ばれてくる。

ユレーナが商人の財布を気にしているのか、本当に食べたいのか、品目の中から安いのはかり注文しているのを見とがめて、商人は太っ腹なことに大きな刺身の舟盛りを頼んだ。俺は骨と皮ばかりのメリハリのない体が好きじゃないんだ、と聞いてもない好みのこと

をしゃべっているものの、ユレーナが魚を好むことを知っていたの振る舞いだ。まるで自分が食事をさせていないようではないか、とはハイラムも言わなかったが、眉を鋭くしかめながら滋養のありそうなものを選んでいくつか注文する。ユレーナはダイエットなど気にするふうでもなく、次から次へと手をつけていった。

ユレーナがその華奢な体のどこにそれだけの量が入るのだというくらいに食事に専念しているあいだ、男二人は適度につまみながら互いの情報を寄せ合う。商売については互いに利益を探りつつの会話となった。他には、久々にタルバルダル市に寄ったアゼルドアーから首都や主要都市の様子、アゼルドアー自身や各地に暮らす知人の近況を聞き、こちらの暮らしも少なからず伝え、ハイラムとアゼルドアーでユレーナの将来の方向性について討議したが、十五歳になるのに公的な学校に通っていないのは問題じゃないかというところが主で、アゼルドアーはなんなら自分が拠点にしている大都會ブリントに連れて行ってやるぞと言い、ハイラムは己が取得している魔法技術者養成担当官？に弟子入りした者は公的に認められた学校を出たと同じ扱いになると言って引かなかった。話題の中心の本人にも「どうしたい？」と訊ねたが、当のユレーナは曖昧に微笑んで困ったように首をひねるだけだった。

よく食べて、よく飲んで　この地ではアルコール度数が低い酒ならば二杯まで飲んでも飲酒運転にはならないが、寝不足のハイラムは念のため酒を一口も飲まなかった　よく語り、刻は瞬間に過ぎてゆく。夕刻の早い時間から始まった食事も、あと二時間ほどで日付が変わるといふ時刻でおひらきとなった。

「長く引き止めて悪かったな。俺は明後日まではこの街にいるからよ」

「……だつたら、今日会おうと言わなくてもよかったよな？　ええ？　詫びに今度こそうまい話を持ってこい」

「メシおこつたじゃなかよー」

「たかがそれだけでおれの睡眠時間を買収できると思ったのか」

「すみません、アゼさん。たくさんご馳走になっちゃって……」
申し訳なさそうにユレーナは頭を下げる。

「なに。そこは、ありがとう、だろ？」

言い足りなさそうなハイラムを無視したアゼルドアーは、まだ二十代なのにもう刻みこまれつつある目尻の笑い皺を深くして、
「につこり笑ってありがとうって言うときゃ、男は美人の言いなりになるんだからよ」

ユレーナの金褐色のくせ毛をわしゃわしゃと掻き混ぜた。

子供扱いなのか年頃の娘にふさわしい扱いなのか測りかねるが、
ユレーナは頭を抱えるように指を立てて髪を整えながら、

「ありがとう。ご馳走様でした」

と、はにかんだ。

笑い返したアゼルドアーが視線をユレーナの後方に向けると、魔法使いが不請顔で二人を見ていた。アゼルドアーは意地悪そうに口の端を上げてにやにやする。それでますます魔法使いは剣呑な顔つきとなった。それもまたアゼルドアーを爆笑させる。

「おまえ、それは、ダメだ、腹痛え！」

ひーひー涙を流しながら笑い転げるアゼルドアーを見、冷気を纏っているような師匠を見て、ユレーナはなにがなんだかわからず不思議そうに首をかしげた。

04（後書き）

じゃんけんしょ＝じゃんけんぽい、じゃんけんぽい等

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0939v/>

カリーナエの鳥籠

2011年9月20日03時20分発行